音楽科研究主題

聴取活動による音楽的な感受を基にした，思考力,判断力,表現力等を育む授業づくり

～生徒の創造性・主体性を育む音楽の学習活動について～

早川　みち恵

１．主題設定の理由

音楽科の学習活動では，聴く活動の中で「知覚・感受する」ことが重要である。「A表現」においては，生徒は自分自身と向き合ったり，仲間と交流したりすることで，様々に試行錯誤しながら，思いや意図をもったり，思いや意図を深めたり広げたり，技能を身に付けたりして音楽表現し，「B鑑賞」においては，仲間と批評するなどの活動を通して，自ら価値判断し，音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようになることがわかった。

このように，音楽の授業では，「A表現」の学習においても聴取活動を行うことが生徒の思考を促したり深めたりし，音楽表現の工夫につながることが大切である。曲に対する自分のイメージを膨らませ,他者のイメージに共感しながら表現の工夫を考え，強弱や速度などの要素の働きを基に音楽の特徴を捉え，「こんなふうに表現してみたい。」「こんな表現方法もあるのか。」など，更によい表現を求めて工夫するようになる。創作では，身近な楽曲を聴いたり，他の生徒の作品を聴いたりすることで，自分の作品づくりのためのアイデアが生まれたり，自分の作品を見直す視点を見出したりすることができる。聴取活動を授業の中に効果的に位置付けることで，相手が伝えようとしている表現の工夫を知覚・感受する力の向上も期待できる。音楽を表現する技能だけではなく知覚・感受する力も合わせて育むことで,生徒の思いや意図は深まり，さらなる音楽活動の充実を図ることができると考えた。

２．これまでの研究のあゆみ

令和２年度は,「聴取活動による音楽的な感受を基にした，思考,判断,表現力等を育む授業づくり」という主題を設定し，２年計画で研究を行うこととした。１年目である令和２年度は，音楽科で育成する「創造性」について整理するとともに,「主体的な学び」のプロセスモデルの実践及び「主体的に学習に取り組む態度」の評価について研究を進めた。「我が国の伝統音楽」を教材とし，箏の奏法を試したり聴いたりして，知覚・感受を深めながら箏の音色の特徴を捉え，基礎的な奏法を身につけ,弾き方による音色の変化や，平調子による旋律を意識して演奏し箏の響きを味わう授業を行った。ゲストティーチャーを招き,「さくらさくら」の正しい奏法（特に,「押し手（後押し)」,「引き色」,「かき爪」,「割爪」の４種類）を学び，その知識や技能を生かし，前奏や後奏，その他フレーズとフレーズの間に，イメージする音を取り入れ「自分だけのさくら」を試行錯誤しながら演奏する姿が見られた。箏の様々な奏法を目と耳で感じ，学ぶことで，音色の違いを知覚し，楽曲の旋律に合わせてどのような音色を響かせたいのかについて思いや意図をもつことができるようになった。基本的な奏法を習得したのち「自分なりのさくら」を一人一人が表現することを試みた。資質・能力を見取るための工夫として,「振り返りシート」を題材ごとに一枚用意し，記入させ，日々の振り返り，積み重ねが目に見える寝形となり，自信につながった生徒も多くいた。しかし，工夫を言葉や楽譜に書き示すことへの課題が残っ

た。思いや意図があっても，方法や技術がなければ難しく，記載されたものだけでは伝わりにくいものに感じた。２年目である令和３年度は，前奏や間をいかした伴奏を考え，自分たちのイメージにあった曲を創る授業に発展させることにより，これまでの課題解決の一つである，音楽を形づくっている要素を学ぶ機会となると考えた。６月には歌詞や旋律，写真から風景をイメージしたり，変奏曲を聴いたり，色々な奏法を試し，また，仲間と音楽を表現することの楽しさを味わい，音楽を深めることで「創造性」「主体性」を育てようと思い，誰もが耳にしたことのある「きらきら星」のメロディーをアレンジしながら，実際にリズム，速さ，強弱などの違いによる変化を感じ取らせ，「自分なりの星を表現しよう」という創作活動を行った。そのことにより，「ゆったりしたいから音符の長さを長くする」や「楽しい感じにしたいので，跳躍やスタッカートで表現する」など，思いを実現するための方法を模索することができ，改めて，様々な聴取活動の必要性を感じた。11月は，二人一組になり，旋律担当と，前奏，後奏，間を工夫する担当の両方を経験させた。音を合わせることや，音色，旋律，リズム（間）などの音楽を形づくっている要素を感じ，音と音とのコミュニケーションである合奏を行った。生徒が主体となり，学習を振り返る中で，自らの変容（感じ方や考え方）や　成長に気がつくことにより，我が国の伝統音楽に親しむ気持ちを育てることにつながるようにしたいと考えた。

３．全体研究との関わり

全体研究主題『創造性に富んだ，未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～』の実現のため，音楽科での研究テーマを「聴取活動による音楽的な感受を基にした，思考, 判断, 表現力等を育む授業づくり」という主題を設定し，２年計画で研究を行った。

① 音楽科で育成する「創造性」について

全体研究において「創造性」は，①課題の解決に向けて②これまでに学んだことや新たな知識，技術革新を結び付けていかし③新たな価値を創り出すために必要な資質・能力だと述べており，これは，文部科学省が示す「Society5.0を牽引する人材」の資質・能力と一致するとしている。

ここで,「音楽的な見方・考え方」について目を向けてみる。「音楽に対する感性を働かせ，音や音楽を，音楽を形づく要素とその働きの視点で捉え，捉えたことと，自己のイメージや感情，生活や社会，伝統や文化などを関連付けること」「（前略）音楽的な見方・考え方を働かせた音楽科の学習を積み重ねることによって広がったり，深まったりするなどし，その後の人生においても生きて働くもの」と平成29年告示学習指導要領に解説されている。生徒に，様々な音楽に触れさせ，楽曲の特徴や，その曲想をもたらしている諸要素に焦点をあてながら，生徒が音楽の多様性を感じ取り，理解することを繰り返すことが感性を働かせることにつながり，創造性を育むことにもつながると考える。

② 音楽科における「主体的な学び」のプロセスモデルの実践

授業づくりの要素として,「問いを持つことのできる題材」「題材の導入の工夫」「ワークシートの工夫と生徒への働きかけ」であると考え，生徒の実態を把握し，それに合った題材を検討することで精選

される「問いを持つことができる題材」により，生徒自身が問いを持ち，その解決に向けて主体的に取り組むことができると考える。生徒がより感性を豊かにし，主体的に音楽の学習活動に向き合えるためには，生徒が興味・関心をもてるような題材設定と授業での発問や教材の工夫が求められる。また，生徒が普段あまり接することのない分野の「音や音楽との出会い」も大切にしていきたい。そして，音楽科の研究主題との関連を意識し，聴取活動による音楽的な感受をもとに，感性をより働かせる学習過程を授業において実現することを目指して研究を進めていきたい。

音楽科における「主体的な学び」のプロセスモデルと学習過程

プロセスモデル	学習過程	学習活動
目標設定	課題をみつける	既習の知識および技能を基に，課題を決定する
方略計画	学習を見通す	解決の見通しをもち，計画を立てる
遂行　振り返り	課題解決のために必要な知識や技能を習得する	様々な方法を試し，解決方法を探る 工夫して表現する
方略調整	課題解決に向けた実践	個人・交流活動を通し，知識技能をさらに深める
全体の振り返り	実践活動の評価・改善	気づきや発見を明確にし，次につなげる

４．今年度の研究について

(1) 研究の目的

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して「音楽的な見方・考え方」を働かせ，知識や技能を得たり生かしたりしながら，自分の表現したいことや考えたこと，理解の状況などを自ら把握し，学習調整しながら主体的に学習に取り組むことで，新たな価値を生みだすことができる生徒の育成を目指したいと考えている。

昨年度は，生徒が「我が国の伝統音楽」に親しむことができるよう，生徒の興味関心が高かった器楽（箏）の活動を行った。ゲストティーチャーを招き，「さくらさくら」の正しい奏法（特に，「押し手（後押し）」，「引き色」，「かき爪」，「割爪」の４種類）を学び，その知識や技能を生かし，前奏や後奏，その他フレーズとフレーズの間に，イメージする音を取り入れ「自分だけのさくら」を試行錯誤しながら演奏する姿が見られた。箏の様々な奏法を目と耳で感じ，学ぶことで，音色の違いを知覚し，楽曲の旋律に合わせてどのような音色を響かせたいのかについて思いや意図をもつことができるようになった。しかし，「我が国の伝統音楽」そのものに親しみ，愛着をもてるようにするには，1学年の数時間では難しい面がある。今後，２年生，３年生と進級するにあたり，系統立てて「我が国の伝統音楽」を教材とした授業を構成することで，中学校卒業後も興味関心をもって「我が国の伝統音楽」に親しむことのできる生徒を育成できると考えた。本年度は，昨年度の学びを更に発展させ，二人一組になり，旋律担当と，前奏，後奏，間を工夫する担当の両方を経験させる。音を合わせることや，音色・旋律，リズム（間）などの音楽の諸要素を感じ，考えながら，音と音とのコミュニケーションである合奏の楽し

さや喜びを感じられるようにしたいと考えている。そのため，授業においてどのように「主体的な学び」をデザインするかを考え，生徒が思考・判断・表現する力を高めることにつながる効果的な聴取活動の在り方を探ることを通し，歌唱・器楽・鑑賞・創作の各領域や分野を関連付けて取り組むことのできる授業を構成し，聴取活動をどの場面でどのように位置付ければ効果的であるかを明らかにしていきたい。

(2) 研究の内容

①それぞれの違いや共通点などを学ぶことを通して，思考力・判断力・表現力をより高めることのできるような題材設定を行う。
・主体的に意欲をもって学習ができるような題材や授業の開発

②主体的な学びのプロセスモデルの作成
・ねらいや学習内容が整理できる言語活動やワークシートの工夫
・PDCA サイクルの中で，より主体的に学習ができるような授業づくり

① 授業により育まれた資質・能力の見取りについての工夫と実践を重ねる。
・学習カードの記述，仲間との交流による観察，ＩＣＴ機器を活用し，生徒の表現活動の記録や分析などを活用した評価方法や評価規準の作成。

○音楽科で身につけさせたい資質・能力について

新学習指導要領では，全ての教科・領域等において「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で資質・能力の育成を目指すことが示された。本校の音楽科では，三つの柱の中でも特に「思考力，判断力，表現力等」を高めることを研究の目的としている。「思考力，判断力，表現力等」は，それ単独で高められるものではなく，他の二つの柱と密接に関わりあっている。生徒が既有の知識や技能を活用して音楽活動を行う中で，さらに新たな知識や技能を得ることや，意欲的に音楽活動に取り組むことで豊かな情操を養ったり，感性を高めたりすることが「思考力，判断力，表現力等」を高めることにもつながっていると考えている。

新学習指導要領解説では，音楽的な見方・考え方を「音楽科の特質に応じた，物事を捉える視点や考え方であり，音楽科を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」として次のように示している。

【中学校音楽科】

音楽に対する感性を働かせ，音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え，自己のイメージや感情，生活や社会，伝統や文化などと関連付けること。

このことから本校音楽科では，「音楽的な見方・考え方」を働かせ，「思考力，判断力，表現力等」を高める授業の構成を目指していく。その方策として，聴取活動による音楽的な感受の場面を効果的に取り入れることで，生徒に音楽の多様性を理解させるとともに，自分たちで音楽表現を創意工夫できる力を身につけさせたいと考えた。

○資質・能力を見取るための工夫

具体的な見取り方に関しては，生徒自身が前時までの授業内容や感じたことなどを思い出すことができ，教師も生徒の状況を把握することができる「振り返りシート」を作成した。記述に要する時間

を短縮し，実技にかける時間を増やすことが大切だと考えた。教師は生徒の感想でよかった箇所に線を引いたり，理解していないことについては訂正のコメントを入れたりして返却し，授業内での仲間の発言や色を変えて書き留めるなど，より詳しく生徒の資質・能力の見取りができるように考えた。

また，映像や音声を使った見取りについても，工夫していきたい。振り返りシートやワークシートだけでは見取りきれない生徒のつぶやきや，技能の変化，会話の様子などは，映像や音声で残すことが有効であると考えられる。授業の最後には，今日の振り返りとしてロイロノートを使用し，自分たちの姿を残すことにした。各自で成長の過程を目や耳で確認でき，教師側も指導助言，活動を見取る際にそ活用できると考えた。

5　研究の実際（実践事例）

第２学年音楽科学習指導案

指導者　早川　みち恵

１．題材名　　箏の奏法や音色，間を生かして，「さくらさくら」の合奏をしよう

２．題材の目標

（１）箏の音色や響きと奏法との関わりを理解するとともに，創意工夫を生かした表現で演奏するために必要な奏法，身体の使い方などの技能を身に付ける。（知識及び技能）

（２）箏の音色，旋律，リズム（間）を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，知覚したことと感受したこととの関わりについて考え，曲にふさわしい器楽表現を創意工夫する。（思考力・判断力・表現力）

（３）箏の音色や奏法，リズム（間）や旋律の変化によって生み出される雰囲気や表現の違いに関心をもち，音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に学習活動に取り組むとともに，「我が国の伝統音楽」に親しむ。（学びに向かう力・人間性）

３．指導事項との関連

第２学年及び第３学年　「A表現」(2) 器楽　ア，イ(ｲ)，ウ（ア）

〔共通事項〕（１）ア（本題材の学習において，生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素：「音色」「リズム（間）」「旋律」）

4. 題材設定の理由

本題材は，中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説音楽編 A 表現 (2)ア，イ（イ），ウを受けて設定した。昨年度は，生徒が「我が国の伝統音楽」に親しむことができるよう，生徒の興味関心が高かった器楽（箏）の活動を行った。ゲストティーチャーを招き，「さくらさくら」の正しい奏法（特に，

「押し手（後押し)」,「引き色」,「かき爪」,「割爪」の４種類）を学び，その知識や技能を生かし，前奏や後奏，その他フレーズとフレーズの間に，イメージする音を取り入れ「自分だけのさくら」を試行錯誤しながら演奏する姿が見られた。箏の様々な奏法を目と耳で感じ，学ぶことで，音色の違いを知覚し，楽曲の旋律に合わせてどのような音色を響かせたいのかについて思いや意図をもつことができるようになった。

しかし,「我が国の伝統音楽」そのものに親しみ，愛着をもてるようにするには，1学年の数時間では難しい面がある。今後，２年生，３年生と進級するにあたり，系統立てて「我が国の伝統音楽」を教材とした授業を構成することで，中学校卒業後も興味関心をもって「我が国の伝統音楽」に親しむことのできる生徒を育成できると考えた。本年度は，昨年度の学びを更に発展させ，二人一組になり，旋律担当と，前奏，後奏，間を工夫する担当の両方を経験させる。音を合わせることや，音色，旋律，リズム（間）などの音楽を形づくっている要素を感じ，音と音とのコミュニケーションである合奏を行う。生徒が主体となり，学習を振り返る中で，自らの変容（感じ方や考え方）や　成長に気がつくことにより，我が国の伝統音楽に親しむ気持ちを育てることにつながるようにしたい。

５．教材について

（1）教材名

【聴取教材】　　雅楽「越天楽」

「六段の調べ」　（八橋　検校）

【器楽教材】　　「さくらさくら」（手ほどき教則本 山田流箏譜 /邦楽社/中能島欣一）

（授業者による編曲）

（2）教材選択の理由

今回の授業では，合奏による音の重なり，音楽の広がりを知覚，感受させ，豊かな情操を養い，感性を高めたいと考えた。昨年度は，一人での演奏だった「さくら」に前奏や後奏，間を生かした音を重ねることで生まれる新しい響きや，音楽の楽しさを体感させることにより，更に和楽器の特徴である音色や響き，そして,「我が国の伝統音楽」そのものへの興味がさらに深くなると考えた。また，愛着をもてるようにするには，1 年生，２年生，３年生と進級するにあたり，系統立てて「我が国の伝統音楽」を教材とした授業を構成することで，中学校卒業後も興味関心をもって「我が国の伝統音楽」に親しむことのできる生徒を育成できると考えている。本年度は，昨年度の学びを更に発展させ，二人一組になり，旋律担当と，間を工夫する担当の両方を経験させる。音を合わせることや，音色・旋律，リズム（間）などの音楽の諸要素を 考えながら，音と音とのコミュニケーションである合奏の楽しさや喜びを感じられるようにしたいと考えこの教材題材を選択設定した。

6. 題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①知　箏の音色や響きと奏法との関りについて理解している。（知識） ②技　創意工夫を生かした表現で演奏するために必要な奏法，身体の使い方などの技能を身に付け，箏の演奏でで表している。（技能）	思　箏の音色，旋律，リズム（間）を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，知覚したことと感受したこととの関りについて考え，曲にふさわしい器楽表現としてどのように演奏するかについて思いや意図をもっている。	態　箏の音色や奏法，リズム（間）や旋律の変化によって生み出される雰囲気や表現の違いに関心をもち，音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に器楽の学習活動に取り組んでいる。

7. 指導計画と評価計画（4 時間）

時	◎ねらい　〇学習内容　・学習活動 【プロセスモデルとのかかわり】	評価規準 【評価方法】 知・技	思	態	☆Aと判断する生徒の状況例 ■個別な働きかけを要する生徒への支援
1時間目	◎音を重ね合わせることによって生まれる音の響きや間（ま）を工夫し，自分たちの「日本らしいさくらさくら」を考える。				
	2.日本らしい「さくらさくら」とは何かについて考える。 ・導入で振り返った伝統音楽の特徴にあった「間」を生かした表現で，我が国の伝統音楽を味わえるようにする。 3.自分たちのイメージする日本らしい「さくらさくら」にするためにはどのような工夫が必要かを考える。 ・実際に箏を弾きながら，自分たちのもっている「さくらさくら」のイメージと結び付けていく。 ・音色や強弱，間の取り方，テンポ感など様々試しながら，どのように演奏していくと思い通りの演奏になるのか方向性を見極めていく。 【目標設定】　【遂行】 4.本時の活動を振り返る。 ・本日の学びと次回への課題をワークシートに記入し，今後の見通しを持つようにする。 【振り返り】	↓	↓	↓	☆それぞれの音楽の特徴や共通点を見つけ，我が国の伝統音楽の良さを味わうことができる。 ■ 特徴，共通点が見つからない生徒は，仲間の意見を聞く中で自分の考えをもてるようにする。
2時間目	◎音を重ね合わせることによって生まれる音の響き，合わせる際の工夫など，試行錯誤しながら演奏活動を行えるよう思いや意図をもつ。　（練習①）				

	○日本らしい「さくらさくら」のイメージをもちながら練習する。 （４人グループではあるが，演奏は 2 人で行う。演奏していないときは，助言をしたり，自分達の演奏を試行錯誤する時間とする。） ○合奏をするにあたり，お互い大切だと思うことを確認する。 ・テンポ感，息遣い，バランスなど【方略】 ・様々な方法があり，それによって感じ方が違うことを改めて理解する。【遂行】 ○実際に何度も合わせることにより，一番良い形を探る。 ・イメージ通りの演奏ができているか動画を撮って確認し，修正する。 【遂行】 ○仲間の演奏を聴き，旋律や音色，奏法等の関わりについて考える。 ・仲間の演奏を聴き，音楽の変化について気付いたことや感じ取ったことを意見交換する。 ・演奏に際して気を付けることや，気に入ったところ，自分自身に足りない部分などについてワークシートに記入する。 【方略・調整】 ○本時の活動を振り返る。 ・自分の表現したい思いをどのように音楽要素と関りをもたせるかについて，学んだことを記入する。 【振り返り】	① 知 【観察・発言】			☆間の取り方だけでなく音色に対しても意識をもち意欲的に取り組んでいる。 ■方向性を定め，ほかのグループの演奏を聴かせ，特徴を思い出させる。
3 時 間 目	◎日本らしい「さくらさくら」になるよう創意工夫しながら演奏することができる。（練習２）				

	○これまでの復習を行う。 ・学級全体で今後の流れを確認した後，ペアでそれぞれの練習をする。【方略計画】 ○「さくら」をどのように演奏したいかについて考え，ペアに伝え共有する。 ・音色，伴奏なども考え加 ・ペアでお互いに演奏し合い，感じたことを伝え合う。【遂行】 ○本時の学習を振り返る。 ・ワークシートに本時に学んだことや次時に向けてのめあてなどを記入する。【振り返り】		思 【観察・ワークシート】	↓	☆音色や奏法を生かした演奏ができる。仲間と意見交換したり，自分の言葉でまとめたりしている。 ■工夫できない生徒には，仲間の演奏を参考にさせたり，教師が様々な弾き方を聴かせたりする。
4時間目	◎本題材の学習を振り返りながら学習活動に取り組み，あなたが考える自分だけの「さくらさくら」を表現し，間を意識した演奏を発表することができる。				
	○4 人のグループになり，お互いに演奏し合い，聴き合う。 ・「思いが伝わる合奏になっている」という観点で自分の演奏を振り返ったり，仲間の演奏の感想を伝えたりする。【方略調整】 ○題材全体を振り返る。 ・題材を通して学んだことや感じたことをワークシートに記入する。 ・振り返ったことについて学級全体で意見交換する。【振り返り】	② 技 【観察・演奏】		態 【観察・ワークシート】	☆ 間を生かした演奏ができる。 ☆仲間と意見交換したり，自分の言葉でまとめたりしている。 ■弾けない生徒に対しては，部分的でよいのでできることを演奏させる。 ■ワークシートへは仲間の意見を参考にして，箇条書きで書き出してから文章を記述させる。

8.本時の授業について　（1 時間目）

（1）日時　令和 3 年 11 月 4 日（木）8：50～9：40

（2）場所　山梨大学教育学部附属中学校　第 1 音楽室

（3）本時の目標

音を重ね合わせることによって生まれる音の響きや間（ま）を工夫し，自分たちの「日本らしいさくらさくら」を考える。

(4) 展開

過程	学習のねらいと学習活動	教師の指導・支援	評価・備考
導入 (10分)	1.我が国の伝統音楽の特徴についての振り返りをする。 ・雅楽「越天楽」と「六段の調べ」を聴き，共通点を探ることにより特徴に気づく。 ・個人で考え，その後グループ（4人）で意見共有する	・昨年度学んだことを思い出させる。 ・雅楽「越天楽」と六段の調べを聴きそれぞれの特徴を書き出し，共通点を探る。 <予想される生徒の発言> ・ゆっくり　のんびり ・音の重なりがある （ずれがある） ・拍がとれない ・間がある ・余韻がある　　など	・学習形態 一斉 付箋に記入 個人からグループ ・一斉
展開 (30分)	日本らしい「さくら　さくら」を表現しよう。 2.日本らしい「さくらさくら」とは何かについて考える。 ・導入で振り返った伝統音楽の特徴にあった「間」を生かした表現で，我が国の伝統音楽を味わえるようにする。 3.自分たちのイメージする日本らしい「さくらさくら」にするためにどのような工夫が必要かを考える。 ・実際に箏を弾きながら，自分たちのもっている「さくらさくら」のイメージと結び付けていく。 ・間を工夫しながら合奏することを確認する。 ・音色や強弱，間の取り方，についての違いについて再確認する。 ・まずは，個人で，その後，2人で相談し，箏の音色で試しながらどのように表現していくか考える。 【目標設定】　【遂行】	・各自で考える 〈予想される生徒の考え〉 淡い・穏やか・華やか・はかない等 ・共通点の中でも，今回は，「間」の取り方（音の重なりも含む）について重点を置きながら学習していくことを伝える。 ・「さくらさくら」の初め分を弾き生徒に旋律を弾かせ，教師が音を重ねていく。 ・ゆっくり，速くなど，様々な弾き方，タイミングがあることを感じ取る。 ・2人で1面使用し，実際に音色を確認しながら話し合うようにする。 ・イメージを膨らませられるよう音で自由に確認するよう促す。 ・音の重なりや音色によって響きが変わるという音楽の変化に気付かせる。 ・ワークシートに自分の考えを記入させる。	・学習形態 個人，ペア 知　箏の音色や響きと奏法との関りについて理解している。

まとめ （10分）	**４．振り返りシートに自分の考えを記入する。** ・個人で活動を振り返り，全体で意見を共有し，それぞれの反省と課題についてまとめる。 ・次回の目標もたてて意識づけをする。 **【振り返り】**	・個人の活動についてまとめたうえで，仲間の意見に耳を傾けることにより，多様な音楽のよさや美しさに気づくことができる。	・学習形態 個人　一斉

（５）　本時の評価

箏の音色や響きと奏法との関りについて理解している。（知識）

６　研究のまとめ

二年間の研究を終え，聴取活動を授業の中に効果的に位置付けることで，相手が伝えようとしている表現の工夫を知覚・感受する力の向上につながることがわかった。曲に対する自分のイメージを膨らませ，他者のイメージに共感しながら表現の工夫を考え，強弱や速度などの要素の働きを基に音楽の特徴を捉え，「こんなふうに表現してみたい。」「こんな表現方法もあるのか。」など，更によい表現を求めて工夫する姿があった。音楽を表現する技能だけではなく，知覚・感受する力も合わせて育むことで，生徒の思いや意図は深まり，さらなる音楽活動の充実を図ることができた。また，グループやペア活動をすることにより，他者との意見交換，表現方法，音の伝わり方をより身近に学ぶことができ，生徒の思考を促したり深めたりし，自分自身の音楽表現の工夫や視点を見出したりすることができた。今回の授業は，間を生かした音を重ねることで生まれる新しい響きや，音楽の楽しさを体感させることにより，更に和楽器の特徴である音色や響き，そして，「我が国の伝統音楽」そのものへの興味がさらに深くなった。箏を２年間継続させて取り入れることにより，演奏することに対しての自信と愛着につながったように感じる。雅楽や歌舞伎，能等の鑑賞時に楽器の音色の特徴に意識を向ける生徒も増え「間」や「日本らしさ」「余韻」というものを感じる生徒が増えてきた。今後も，「我が国の伝統音楽」を教材とした授業を構成することで，中学校卒業後も興味関心をもって「我が国の伝統音楽」に親しむことのできる生徒を育成していきたい。

〈引用・参考文献　等〉

・中学校学習指導要領　文部科学省　H29

・中学校学習指導要領解説　音楽編　　文部科学省　H29.6

・評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校　音楽）
H23　国立教育政策研究所　教育課程研究センター

・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　音楽編　文部科学省
R2.3 国立教育政策研究所　教育課程研究センター

・山梨大学教育人間科学部附属中学校研究紀要　H23~27

・山梨大学教育学部附属中学校研究紀要　H28～R1

・中央教育審議会　「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」　H28.12　文部科学省

・中学校新学習指導要領の展開　音楽編　H29　副島和久編著　明治図書

・中学校教育課程実践講座　音楽　H30　宮下俊也編著　ぎょうせい

・中央教育審議会　「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」　H31　文部科学省

・中学校新学習指導要領「音楽の授業づくり」　H30　加藤徹也・山﨑正彦著　　明治図書出版

・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
R2　国立教育政策研究所　教育課程研究センター